

—市道内谷線石谷工区地方道路交付金(改良)工事に伴う発掘調査報告書—

# 広戸A遺跡調査報告書

2007年3月

島根県益田市教育委員会

—市道内谷線石谷工区地方道路交付金(改良)工事に伴う発掘調査報告書—

# 広戸A遺跡調査報告書

2007年3月

島根県益田市教育委員会



出土した阿高・中津式土器

# 例　　言

1. 本書は、島根県益田土木建築事務所の委託を受けて、益田市教育委員会が平成17年度に行った市道内谷線石谷工区地方道路交付金(改良)工事に伴う広戸A遺跡の発掘調査報告書である。

2. 調査は、次のような体制で実施した。

調査主体	益田市教育委員会		
調査員	益田市教育委員会 文化振興課	渡辺 友千代	
	益田市教育委員会 文化振興課 主任主事 山本 浩之		
調査補助員	益田市教育委員会 文化振興課	栗田 美文	
	" (臨時職員)	大賀 幸恵	大谷 真弓
調査指導員	島根県教育委員会文化財課		
調査助言	山口大学人文学部教授	中村 友博	
調査協力者		渡辺 聰	
事務局	益田市教育委員会 教育長	陶山 勝	
	益田市教育委員会 次長	領家 貞夫	
	益田市教育委員会 文化振興課長	安達 正美	
	益田市教育委員会 文化振興課 係長	木原 光	
	益田市教育委員会 文化振興課 主任主事 山本 浩之		
発掘作業員	齊藤 幸夫	藤井 一美	田中 莫 宮市 勇
	藤井 初義	藤原 剛志	渡辺婦友子 吉原 延子
	大賀 幸恵	大谷 真弓	

3. 調査に際しては、島根県益田土木建築事務所 内藤主幹・糸川主任をはじめ、島根県教育委員会 文化財課に終始多大なご協力をいただいた。また、山口大学人文学部の中村友博教授には一方ならぬご教示を頂いたのである。

なお、発掘現場においては土地所有者をはじめ、地元の方々に終始多大なご協力を得て、ここに無事発掘調査を終えることができたことに対してお礼を申し上げたい。

4. 今回の調査において、柱穴遺構一P、土坑状遺構一SKと略号している。なお、現場あるいは編集に掲示した現地図面は、益田市土地改良区の協力を得た1/1000の縮尺のものであり、また位置図などは縮尺1/25000を使用したものである。

5. 編集にあたっては、前掲の調査員・調査補助員らの協力を得て、執筆・編集は渡辺・栗田がともに行なったものである。

# 目 次

第1章 発掘調査に至る経緯と経過	(渡辺 友千代)	1
第1節 調査に至る経緯		1
第2節 調査の経過		1
第2章 調査地点域の地理・歴史的環境	(渡辺 友千代)	2
第1節 地理的環境		2
第2節 歴史的環境		2
第2章 調査概要	(栗田 美文)	4
第1節 調査区の設定と地区名		4
1. はじめに		4
2. 調査区の設定		5
3. 地区名		5
第2節 堆積状況		5
1. 基本的層序		5
2. 堆積状況		6
第3節 遺物と遺構の検出状況		6
1. 遺物の検出状況		6
2. 遺構の検出状況		6
第4章 出土遺物	(渡辺 友千代)	10
第1節 出上遺物の概要		10
第2節 実測遺物		10
1. 実測土器類		10
2. 実測石器類		13
第3節 小括		16

## 挿図・図表目次

第1図 遺跡位置図	1
第2図 地形断面図	2
第3図 遺跡位置と周辺の遺跡分布図	3
第4図 調査区配置図	4
第5図 土層堆積状況図	5
第6図 地区名と遺構分布図	7
第7図 遺構陥入状況図	8
第8図 土器実測図（1）	11
第9図 土器実測図（2）	12
第10図 土器実測図（3）	14
第11図 石器実測図	15
第1表 遺構計測表	6
第2表 遺物集計表	10

## 図版目次

図版 1 烏瞰する調査地点と周辺

図版 2 1. 調査地点遠望（北東から）  
2. 調査地点近景（南から）  
3. 調査区の設定（東から）

図版 3 1. 発掘風景（南東から）  
2. 東西トレーニチの発掘風景（東から）  
3. 東西トレーニチの南壁の堆積状況  
4. A調査区の北西壁の堆積状況  
5. D調査区の南西壁の堆積状況  
6. E調査区の南西壁の堆積状況

図版 4 1. 遺物の出土状況  
2. 土器の出土状況  
3. 土器の出土状況  
4. 磨製石斧の出土状況  
5. 石鏃の出土状況  
6. 黒曜石（乳白色）の出土状況

図版 5 1. B調査区の遺構表出状況（南東から）  
2. D調査区の遺構表出状況（南から）  
3. SK01遺構の表出状況（南東から）  
4. SK02遺構の表出状況（南東から）  
5. SK03～SK05遺構の表出状況  
6. SK06遺構の表出状況（北西から）  
(南西から)

図版 6 1. SK07遺構の表出状況（西から）  
2. SK02遺構の半截状況（北西から）  
3. SK03・SK05遺構の半截状況  
4. SK06遺構の半截状況（北西から）  
5. P01遺構の検出状況（北東から）  
6. SK01・02遺構の完掘状況（南西から）

図版 7 1. SK03～05遺構の完掘状況  
(南東から)  
2. SK06遺構の完掘状況（東から）  
3. SK07遺構の完掘状況（北東から）  
4. SK07遺構の完掘状況（北から）  
5. SK07-2～4遺構の完掘状況  
6. A拡張・A調査区の完掘状況（南東から）  
(西から)

図版 8 1. B・C調査区の完掘状況（南から）  
2. D・E調査区の完掘状況（南東から）  
3. 全調査区の完掘状況（南から）

図版9 実測土器類（1）

図版10 実測土器類（2）

図版11 1. 実測土器類（3）

2. 実測石器類

# 第1章 発掘調査に至る経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯

本調査は、島根県益田土木建築事務所（以下、益田土木）による「町道内谷線石谷工区交（代行）事業」計画に伴い、それに先行して平成16年4月に匹見町教育委員会が試掘調査を実施したところ、文化層が確認されて遺跡であることから生じたものであった。

そして事業名を市町合併により「市道内谷線石谷工区地方路交付金（改良）工事」と改称され、同事業について益田土木と益田市教育委員会（以下、市教）の内者は、平成17年5月13日に協議した。その結果、記録保存するということに決定することに至ったのであった。

その後同年6月2日、益田土木から第94条1項に基づき市教を介して提出された発掘の通知を島根県教育委員会に送付するとともに、同月3日には係る第99条1項から発掘の通知を市教から提出するなど、現地調査へ至る手続きを絶えたのであった。



第1図 遺跡位置図

## 第2節 調査の経過

本調査地は島根県益田市匹見町石谷口368番地ほかに所在し、地名を広戸（ひろと）といっていることから、これを命名することにした。ただし同域では併行して他事業も実施される予定であったので、これと混同しないようにと、末尾にAというアルファベットを付加して遺跡名とすることにしたのである。

現地調査は平成17年6月20日から始めた。緩傾斜地を水田と化していたために、上位面は削平されていることが窺われ、一方では河沿いという立地から下位層においては旧河道で流出した形跡が捉えられるなど、とくに遺構の残存率は低かった。こうしたネックはみられたものの、中津式土器を中心としていることから縄文時代後期前半期のものであること、そして石器類を合せて約5000点余りが出土し、また多少の遺構の保存から集落が存在していたことが立証されたのであった。

なお、現地調査は平成17年8月29日に無事に終ることができたが、とくに作業員の10名の方がたには梅雨、そして淡天の時節の中、本当にありがとうございましたとお礼を申し上げたい。

（渡辺）

## 第2章 調査地点域の地理・歴史的環境

### 第1節 地理的環境

広戸A遺跡は、島根県益田市匹見町石谷に所在するが、旧匹見町の時期には7大字のうちの1つとして行政区別されていた。現在では益田市匹見支所から西方向、直線にして約7km、益田市街から、は南東側約20kmを測る山間地に位置する（第1図）。

地区を貫流する石谷川は、津和野町と境山をなす南西端の上内谷峠（標高600m）に発し、中流域で北西流した内石川を合せて約8km北東流して本流匹見川と合流している。これは白亜紀に生成されたという珪長質火山岩を基盤とするもので、それが北東—南西方向の陥没体の断層谷によって形成しているがためである（「匹見層群」『中国地方地学事典』）。そしてとり囲む地壘山地は低位で標高600m、高位では約800m前後であるが、人文活動域は石谷川や内石川が形成した標高約250～500mを測る狭長な河岸段丘が中心である（図版1）。



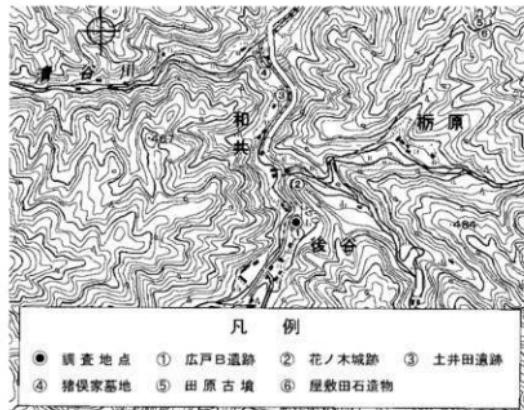
第2図 地形断面図

石谷といっている今の地区は、明治7～同22年までの村名に端を発しているもので、それ以前の内石村そして内谷村が合併して成立したものであった。石谷とはその両村の末字をとって名付けられたものである。両字名とも前音を「内」と書いて「ウツ」と読ませているように、その語源には“狭い”という意味が込められているものであるが、真しくそういった地形的立地にあるといえる。

### 第2節 歴史的環境

石谷川本流域を内谷、その有支である内石川流域を内石と2区別された本地区は、山野を利用してシイタケ・コシニャクイモ・ワサビを栽培するなど兼業農家がほとんどである。昭和50年代までは共同でミツマタを栽培し、紙幣の原料として局納するなどの特産にも力を入れていたが、高齢化の問題もあって中絶してしまった。農業は狭い流域で行われるために、田畠はもっぱら山地の傾斜を利用することになり、そのため石垣の棚田がひときわ顕著で美しい。

社・寺としては内石に薬蛇神事（市指定）を伝える田原大元神社があり、内谷には若宮神社、そして通称は庵寺といわれている浄土真宗の自了寺が現存している。今では廃校（平成元年）となつたが、もとは石谷小学校、農協支所が置かれていたなど本地区的中心は内谷集落である。近世期の天保郷帳によると内谷村185石、内石村183石余りの生石とあって、ほぼ同等の地力を有していたらしいが、とくに内石集落の過疎化が激しい。



第3図 遺跡位置と周辺の遺跡分布図

内谷には木地屋原鍛という地名もみられ、木地師が逗留していたとともに、鍛業が行われていたことがわかる。また内石には中上鍛冶屋・金山鉋・吹屋床鉋・屋敷田鉋跡といった製鉄遺跡がある。また、本調査地の内谷では本村を支配した猪俣庄屋家の墓地が指呼にあり、当家は中世末期に花ノ木城主の末裔だったといわれている。そして磨製石斧や玦状耳飾りが採集された土井田遺跡は、該当期における鍛跡であった遺称と思われる。また境山として両地区を別ける峠近くの内石側には中世期の五輪石塔、そして田原古墳がみられるなど辺地とはいえ、原始・古代遺跡もけして暗くはなかったのである（第3図）。民俗芸能として伝承されている内谷囃子田（市指定）は、上内谷峠を境として接する津和野町日原の横道からのものであり、こうした人文交易は北東—南西方向に走る断層谷が重要な役割を果たしてきたことであろう。

（渡辺）

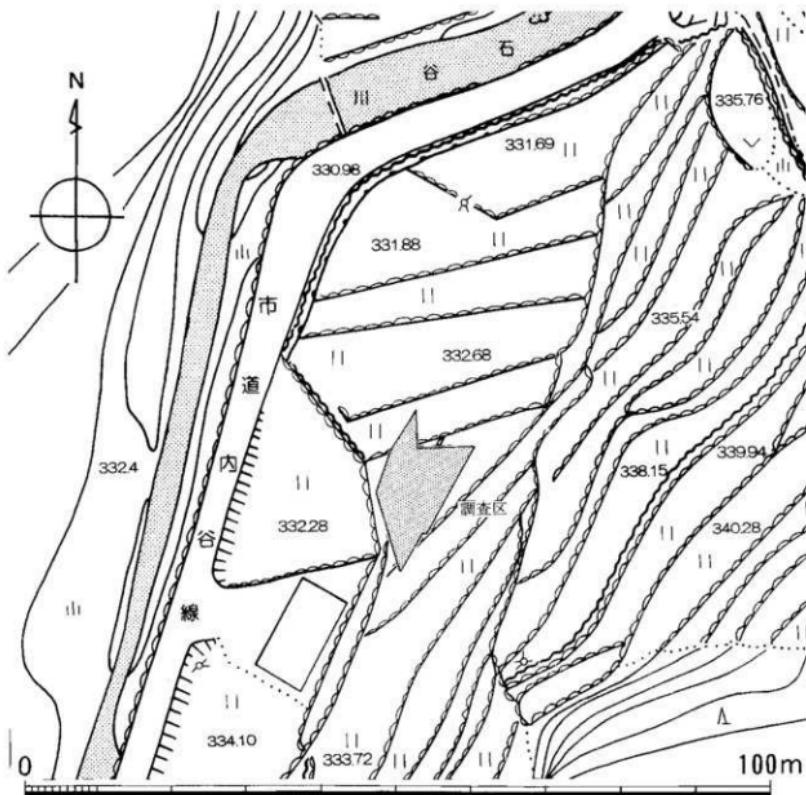
## 第3章 調査概要

### 第1節 調査区の設定と地区名

#### 1. はじめに

本遺跡は、島根県益田市西見町石谷口368番地ほかに所在し、その地点の広戸（ひろと）と呼称される地名をもって遺跡名とすることにした（第1・2図・図版1）。

該当地は、南西—北東方向に流下する石谷川の右岸にあって、その東側から派生した山裾が緩やかに河岸に沿っているという立地にあるが、対岸は急峻な山地が河川までせまっている。一方その上・下流側にも同様な河岸段丘が形成されており、そこは水田や数軒の民家が点在しているといった環境を呈している（第3図・図版2-1）。



第4図 調査区配置図

## 2. 調査区の設定

調査区の設定にあたっては、平成16年度の分布調査の結果に基づいて、縄文遺物が確認された2つの試掘区（A・B区）を中心に任意に設けることとした。

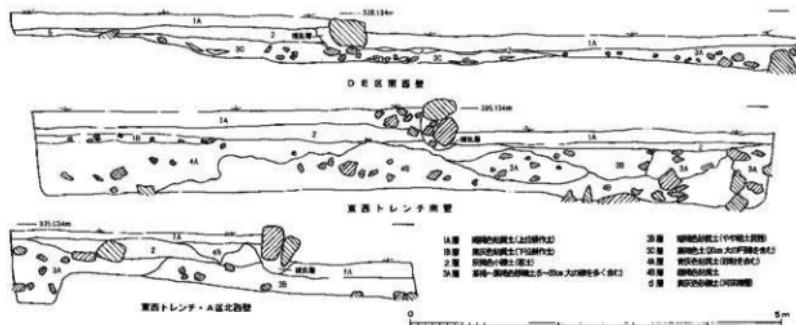
調査区は、基本的には磁北方向を基準に設定しようとしたものであるが、開発予定範囲と水田地形に沿うように設定したため、変則な造り方となってしまった。したがって区形は変形を呈し、その調査面積は約82m<sup>2</sup>であった（第4図・図版2-2）。

### 3. 地区名

このような調査区内には、南一北・東一西方向に幅50cmのセクションベルトを設け4分割とした。これら4区画したものは、アルファベットの大文字を用いて、下流側の河寄をA区とし、そして右回り方向順にB～D区と呼称することとしたのである。しかし掘削調査の序盤において、下位層の状況が気になり、そこで東西ベルトの北側に、ベルトに沿った幅1mのトレンチを設け、それを東西トレンチと呼ぶことにして、下位の状況把握につとめた。さらに掘削中盤において、西半部に設定したA・D調査区から遺物が多く出るため、まず余地があるA調査区の北辺を約10m<sup>2</sup>ほど拡張し、これをA拡張区とした。さらにD調査区の南辺も幅30cmのベルトを残して、約7m<sup>2</sup>のE調査区と称する新たな調査区を設けたのである。その結果、調査の総面積は約120m<sup>2</sup>となったのであった（第6図・図版2-3・3-1・3-2）。

## 第2節 堆積状況

### 1. 基本的層序



第5図 土層堆積状況図

本調査地における基本的層序は、1層の水出耕作土（上・下のものに分層）、2層の灰褐色小砾土（客土）、3層の茶褐色～黒褐色土、4層の青灰～橙褐色粘質土、5層の黄灰色砂礫土（河床堆）の順で堆積していた（第5図・図版3-3～6）。

ただし、この層序についてはC調査区では明確に捉えることができなかつたものの、次第に低位に向かってゆく河寄りのA調査区では原層順が把握できたものである。つまり山寄りの東半部では、

3層上位部以上が高い深度で削平されたことが窺われたのであった。以下、基本的層序にしたがい上～下位へと、その状況をみていくこととする。

## 2. 堆積状況

まず1層の水田耕作土はB・C調査区において2重の堆積がみられ、水田の再造成（マチダオシ）がおこなわれたことが窺われたため、上・下層に分層したものである。そのうち上位のものは層厚約18cm前後を測り比較的厚く、また下位のものは層厚約10cmを測り薄い。両層ともほぼ水平に堆積している。つぎの2層、灰褐色をした5cmの大い小礫を含んだ床上としての客土である。山寄りの東半部の深層部では24cmを測るが、河寄りの西側へ向かって希薄となり、欠陥している部分もみられた。これら1・2層からは削平などで搬入したと思われる約200点余りの縄文・近世期の遺物が出土したのであった。

3層は、茶褐～黒褐色をした有機性の堆積土で、色調から3つに分層（A～C）したが、土壤上からは同質のものと捉えられる。層厚は河寄りの厚い部分で50cmを測るが、しかし山寄りのC・E調査区では削平されたらしく、確認はできなかった。したがって、本来は原地形に沿ってある程度の堆積高があったものと想像されるのである。なお遺物は、縄文土器（約3,800点）・石器類（約170点）を伴い出土し、その下位部には遺構も検出したのである（図版4-1）。

青灰～燈褐色の4層は、色調から分層したものの、粘質性の類似するものと思われるもので、層厚は10～70cmを測り、下流側に向かって厚く堆積していた。また層中には10～30cmの大い角礫がみられるなど、層状あるいは上質から判断すると、山地からの地すべり的崩壊上の堆積と思われるものであった。本層からは、攪乱的に混入されたと思われる僅かな縄文遺物が認められた。そして砂礫を含んだ5層は、黄灰色を呈した河床疊層である。D調査区に露出した上位部を見るかぎり、砂礫と円礫におおわれており、状況的にみて掘削していない他の調査区も、おそらく同様な基盤層であろうと思われた。なお本層からの出土遺物は皆無であった。

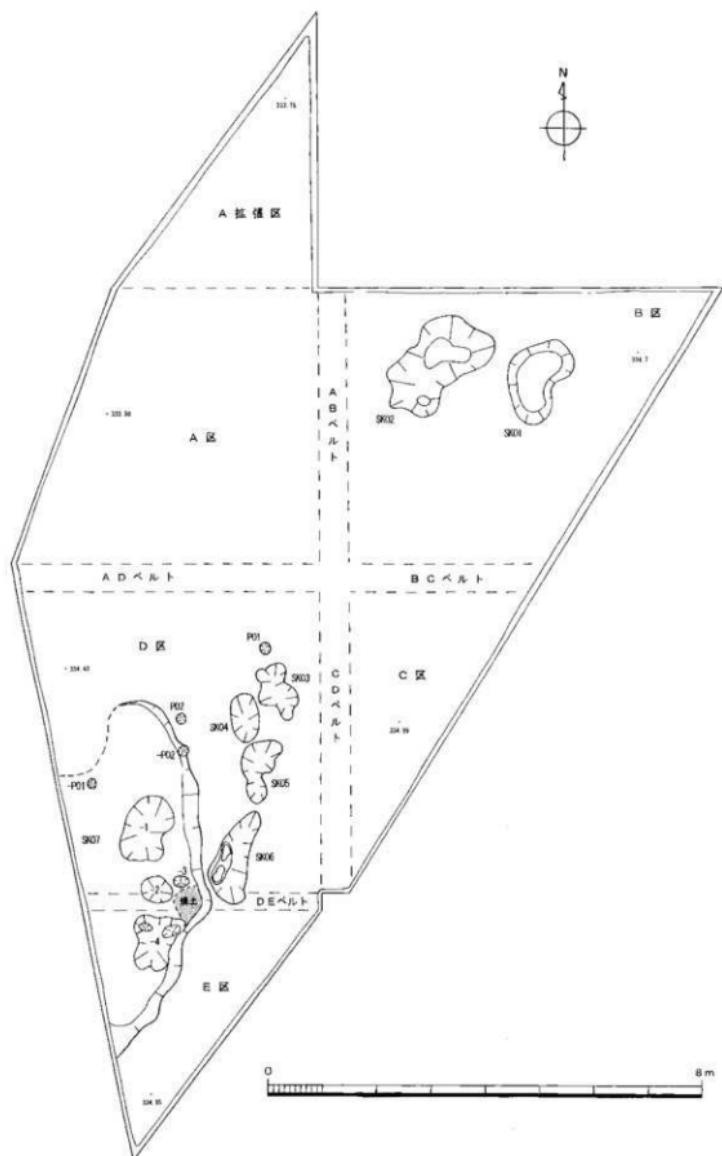
## 第3節 遺物と遺構の検出状況

### 1. 遺物の検出状況

第1表 遺構計測表

遺構名	短径(cm)	長径(cm)	深さ(cm)	表面標高(cm)	摘要
P01	18.0	20.0	14.0	334.574	
P02	14.0	18.0	24.0	334.674	炭化物・焼土・灰土
SK0	90.0	160.0	36.0	334.634	炭化物・焼土
SK02	94.0	230.0	44.0	334.524	炭化物・焼土
SK03	46.0	88.0	25.0	334.664	炭化物・焼土
SK04	52.0	88.0	30.0	334.674	炭化物・焼土
SK05	36.0	114.0	20.0	334.754	炭化物・焼土
SK06	58.0	176.0	52.0	334.774	炭化物・焼土
SK07	-	-	33.0	334.774	炭化物・焼土・灰土
SK07-1	70.0	130.0	22.0	334.504	炭化物・焼土・灰土
SK07-2	50.0	60.0	16.0	334.544	炭化物・焼土・灰土
SK07-3	20.0	30.0	19.0	334.534	炭化物
SK07-4	60.0	122.0	26.0	334.524	炭化物
SK07-P01	16.0	18.0	25.0	334.684	
SK07-P02	16.0	17.0	3.0	334.484	

本調査地点から出土した遺物は、約5000点余りで、その大半が縄文土器類である。これらは前述しているとおり、3層の茶褐～黒褐色上を中心検出したもので、うち石器類は約200点と少なかった。また他には上位層の人口堆積層（1・2層）に2点の須恵器、そして近世期の陶磁器類が7点ほど出土したのであった。このように多量に出土した遺物は、



第6図 地区名と遺構分布図

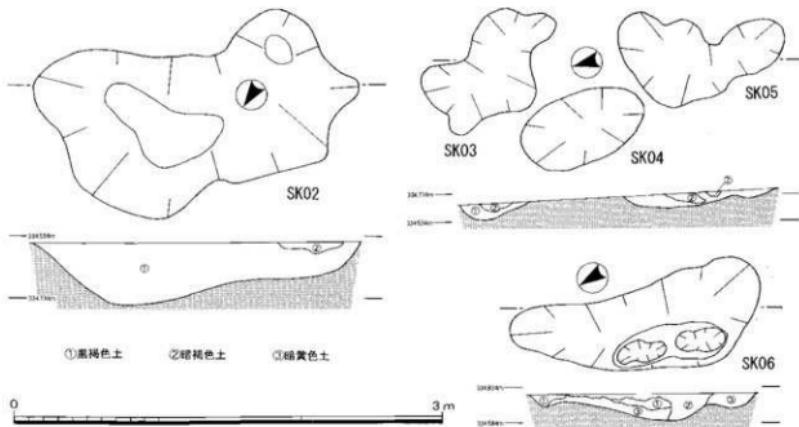
上流側のD調査区に約1600点と最も多く、そしてA調査区とつづき、基盤が上昇する山寄りのC調査区は少ないといった傾向がみられたのであった（第2表・図版4）。

## 2. 遺構の検出状況

本調査では、B・D・Eの3調査区から9基の遺構が検出された。これらの遺構の殆どは3層の茶褐色～黒褐色土と下位層との層界で確認されたもので、また、その表出状況から3層の茶褐色～黒褐色土中から構築されたとも想定でき、遺物の出土の仕方も同様の傾向を示していたのであった。

なお遺構については、凡そ30cm以下の柱穴状のものをP、それ以上の土坑状のものをSKと略号している（第6図・第1表・図版5）。

B調査区の北半面では、土坑状のもの2基が検出された。このうちSK01は、両長径約160cm、短径約90cmを測り、深さ約36cm、湾円状を呈した土坑である。その坑壁は緩やかで、坑内には3層系の土質のものが陥入していた。共伴遺物はみられないが、遺構上位部の縄文遺物の分布、隣接するSK02頗著さからみて、これは縄文期のものであったと想定できるものである。そしてSK02は、最大径約230cm、深さ約44cm測り比較的深く、不整形を呈すものである。その坑内には黒褐色土系のものが陥入し、部分的に暗褐色土系が嵌入していたのである。また坑内からは、多量な炭化物および焼土なども僅かにみられる状況から、炉であった可能性も考えられるが、上位部が削平などによって原形をとどめておらず、地床としての断定するだけの資料を得ることはできなかったものの、しかし、縄文期の遺物が共伴していることから、同時期のものと想定できるものであった（第7図・図版6-1・6-6）。



第7図 遺構陥入状況図

そしてD・E調査区では、柱穴状のものが2基、土坑状のもの5基検出された。そのうち東半に認められたSK03～05は、凡そ径100cm前後で、深さ25cm前後を測って浅く、比較的小なものであつ

た。それらの坑壁は緩やかで、坑内には3層の黒褐色土系が陥入し、少量の炭化物が確認されたという状況であった。そのうちのSK05には、2点の縄文土器片を伴っていた（第8図・図版6-3・7-1）。またその南寄りに検出されたSK06は、短径58cm、長径176cmを測り、滴状を呈して深さ52cmと比較的深く、2つの陥ち込みがみられた。その坑内を覆う埋土は3層の黒褐色土系のもので、多量な炭化物・焼土が認められることから、そこで火が用いられたものと想像された。本坑も3層から4層に至るといった陥入状況、共伴遺物などから縄文期のものであろうと考えられるものであった（第7図・図版6-4・7-2）。

D・E調査区の南西壁に半出しして検出されたSK07は、大半が壁外に介入されており、またその坑の北端部などは河川の影響を受けてか搅乱、または流失している部分があつて、その構造の大きさは判らないが、認められる坑形からすると径約7.5m以上もある大きいものと推測される。その南東側の坑壁はL字状を呈し、坑高は約30cm前後を測り、しっかりとしているものであった（図版6-1）。その坑内には4基の土坑やピット2基もみられるとともに、数地点には焼土塊も検出され、また、焼土塊の周辺には多量の炭化物が出土していることから、炉址としての機能をもつたものが存在したのではないかと思われる（図版7-3～-5）。また、その北半部分の坑内外では、数基の柱穴が確認されており、他上坑と同様な検出状況であったことから、同時期の一連性をもつたものであり、本坑との関連も窺わせるものであったのである（図版6-5）。

いずれにしても今回の調査では、河沿いということもあり、そこには流失的または崩壊的な堆積層を呈していたため、検出には困難を極め、したがって遺構・遺物は原形どおりのものであったとはいえるものではなかった（図版8）。

（栗田）

## 第4章 出土遺物

### 第1節 出土遺物の概要

開発行為範囲、また地形的立地などから変則的な調査区形となった（第3章第一節）が、アルファベットを用いて一応地区を6分割して調査した（第6図）。そして遺物は各地区ごとに層位を捉えながら1括採り上げとしたが、中には混乱があるかも知れない。出土遺物の器種・層位などについては第2表で示しているとおりであるが、須恵器・陶磁器・鉄滓などの13点の縄文遺物以外のものについては、限定の紙刷上の関係から図掲などを割愛した。

第2表 出土遺物集計表

探査区名	社説	縄文		石器		核		縄文		玉類		須恵器		陶磁器		金属器		鉄滓		計
		縄	研	敲	磨	石	核	研	磨	玉	核	研	磨	須	器	陶	磁	金	属	
A 区	1133	1	1	1	1	1	1	1	16	29	3	4	1	1						1194
B 区	193							1	5	6	1			4	1	1	1			212
C 区	42				1				4	5					1			3	56	
D 区	788	1		0	0	1	0	5	30	2	2	2								831
E 区	635	1			2	1		4	18	4	1	1	1							667
共伴遺物	930				1	チャート	1	6	20	2	1									961
A拡張区	815							6	2	1										824
C E ベルト	91								1											92
B C ベルト	6																			6
D E ベルト	195								5											200
トレンチ	87																			87
腐 土	173				1			7	3					1						185
計	5088	3	1	2	5	5	2	53	119	10	5	8	1	2	6	1	4	5315		

出土数5300点余りのうち、5088点という96%が縄文土器で占められた。そして212点の石器類では剥片が183点が多く、そのうちでも安山岩質のものは黒耀石（乳白色）が突出していることは注意できる。また12点のチャート質のものもあるところであるが、こういった比率性は南側に当る匹見上地区の諸縄文遺跡ではみられない現象である。

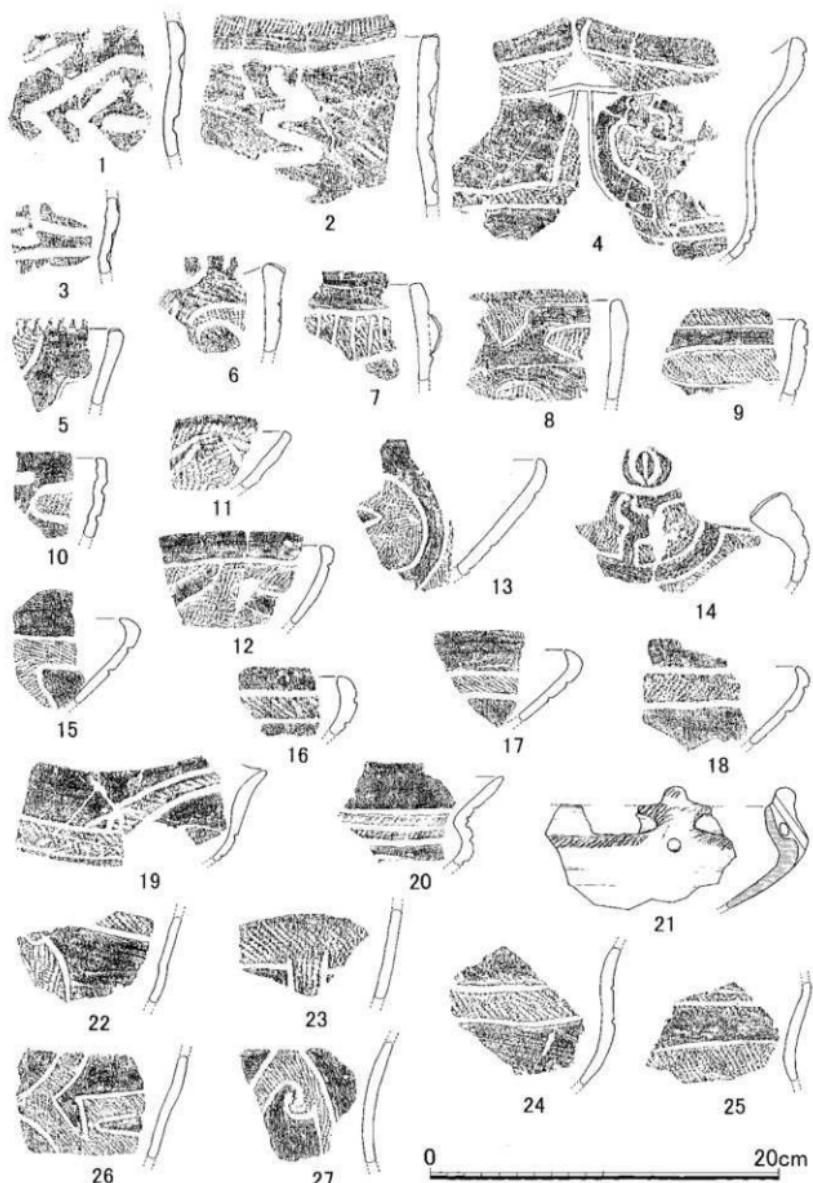
土器では中津式に比定できる後期前半期のものを主体としたものであったが、30点余りの阿高系からは本遺跡の出現が中期末ないしは後期初頭であったことが窺われる。また後続期のものとしては数10片の縁帶文土器もみられる一方、それに僅かな突帶文土器がみられたことから、間断期をもって晩期の文化期が複合していたことが認められる。以下、後節ではそれらの出土比率も考えながら、特徴が捉え易い特に口縁部を中心に紹介していくことにする。

### 第2節 実測遺物

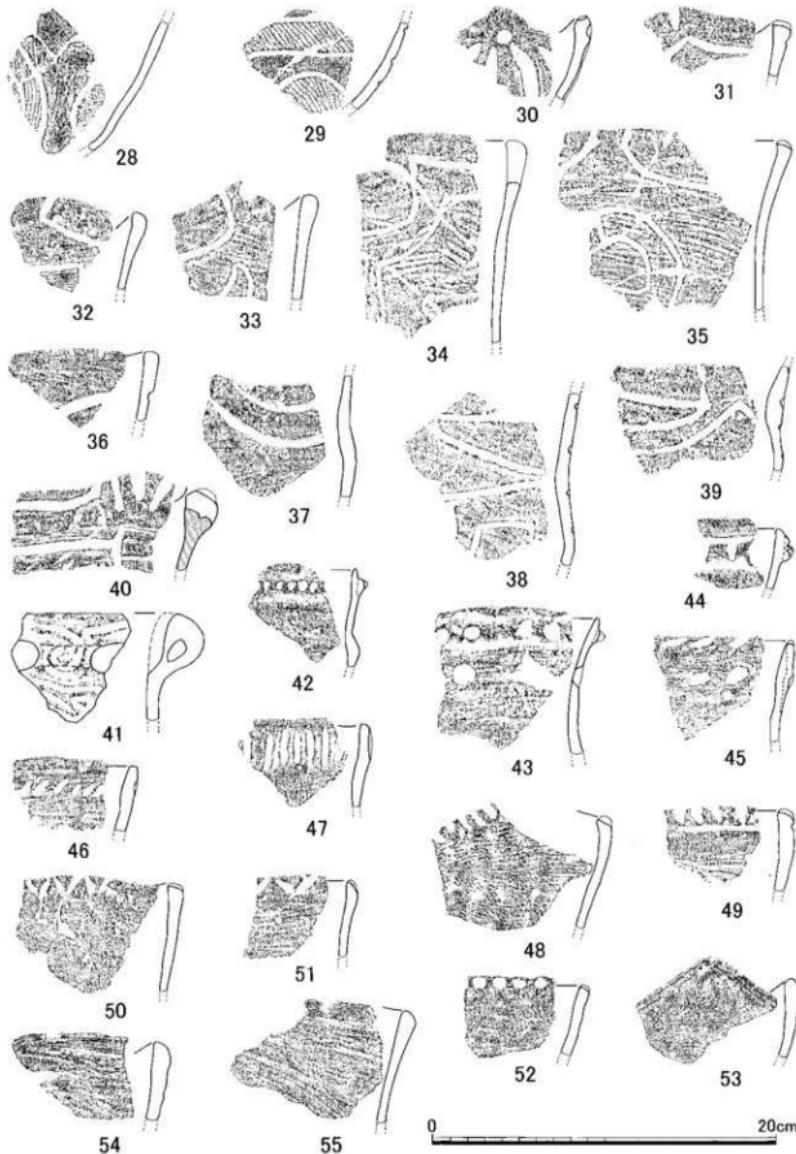
#### 1. 実測土器（第8～10図・図版9～11-1）

1～3は阿高式系土器で、うち1・2は滑石を含む。前者は赤茶色を呈し胴部に菱形、後者は口端に貝の押圧文、そして胴部には縱方向の蛇行文を描き、淡赤～灰褐色を呈する。両者とも凹線で施文し、厚手である。3は、滑石を含まず薄手であるが、調整・施文方法などからみて同系の規範のものとして捉えられる。なお滑石を伴う土器は、このほか20数片出土した。

4～39は後期前葉の縄文土器で、大体でいうところの中津III式に包括できるものである。21の有孔把手付の半壺形を除く、29までのものは磨消縄文系、そして30～39は沈線文系のものである。こ



第8図 土器実測図(1)



第9図 土器実測図 (2)

のうち4は、波状なした口縁部で、そこに方形区画文、胴部には鉤手状の文様で構成としたもの。5・6は、口端部に刻目、そして波頂部片の6には曲線を施文する。7～9は平口縁で、うち7は2条縄文帯を肥厚させ、そこに縦位に沈線を刻んだもので、類品としては潮待貝塚（下関市）にもみることができる。8・9は橢円状曲線をもって幾何学的な文様を描き、両者とも茶褐色を呈する。

10～20は浅鉢・壺形の口縁部である。うち10は曲線、11は直線をもって区画文を描き、12は幾何学的である。13～～19は、2条縄文帯を基軸としたもので福田K2式へ移行直前期のものと思われ、うち13は鉤手状に施文したもの。14は浅鉢系の口縁部で、体部に階段状、突起部には紡錘状の区画文を描き、その沈線内に連続的に刺突する。そして16～18は縄文帯を横走状に、19は、弧状に配したもの。20は、3条の縄文帯で横走りするもので、福田K2式に比定できるものであろう。21は有孔把手付の半壺形といえるもので、肩部を浮帶状に把厚させ、そこにRL縄文を施文する。把手の稜線部にも縄文を配し、そこに縦・横方向から穿孔を施している。色調は灰褐色を呈し、薄手である。類品としては五明田遺跡にみることができる。

30～39は、沈線文系のものである。うち30は突起をなしたもので、刺突や弧線に下垂する沈線は凹線状で太い。阿高式系の影響を受けた別系統のものかも知れない。31は、口縁辺部に沿って施文され、32・33は方形区画状をなし、その沈線は口縁端部までおよぶ。34も同様であるが、下方は曲線的で幾何学的であり、35は鉤手の施文。37～39は胴部片で、うち37は曲線的、38・39は幾何学的な施文。

40は、平坦で幅広の口縁部。その端部には円周させた1本の沈線を通し、突起の頂部には刻目ふうに3本を施文する。胴部には方形区画文で、沈線は太め。橋詰式系統といえるもので、初期の縄帯文。41は橋状把手で、鐘崎式土器。縄文はみられず、把手上には沈線が廻り込んで渦巻文を形成する。42・43は、晩期の刻目突帯文。前者は突帯が太く、刻目は不整形、後者はO字形で均等に刻む。

44～47は、刻目降帯文系の口縁部。このうち44は横位の隆帯の上ドを沈線で区画し、その降帯頂部に巻貝による回転押圧文を施し、そこに殻頂で刺突している。45・46は、広戸B遺跡で顯著である肥厚押圧文土器で、中村友博氏がいう屋敷式土器（「屋敷式土器について」『やまぐち学の構築創刊号』）に当る。うち45は、口端部に刻目がみられ、肥厚押圧文系のうちでは古型に当るものであろう。47は、口縁端が平坦的で、外面への張り出しあり弱く、そこにヘラ具状で上から下方向に短沈線で施文する。44・47は縁帯文系のものであろう。

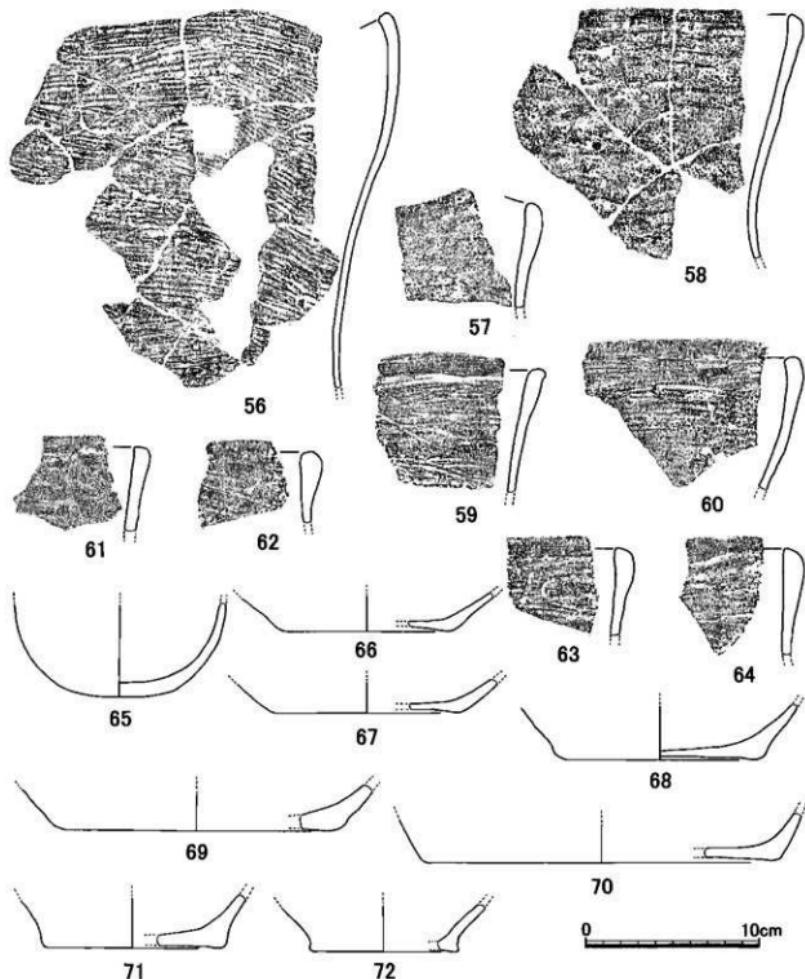
48～52は、無文土器であるものの、口縁端に刻目をもつもの。うち48・50は波状し、50・51はX符号状に刻み、52は巻貝によるものである。53～64は無文粗製土器で、うち58までは波状、以下は平口縁である。

65～72は、底部。うち66までのものは精製系、以下は粗製系のものである。65は丸底で、おそらく注口あるいは壺形などの特殊な器種に伴うものであろう。精製系は底面がやや上がるといった程度で、顯著なものはない。粗製のものは平底のものがほとんどであった。

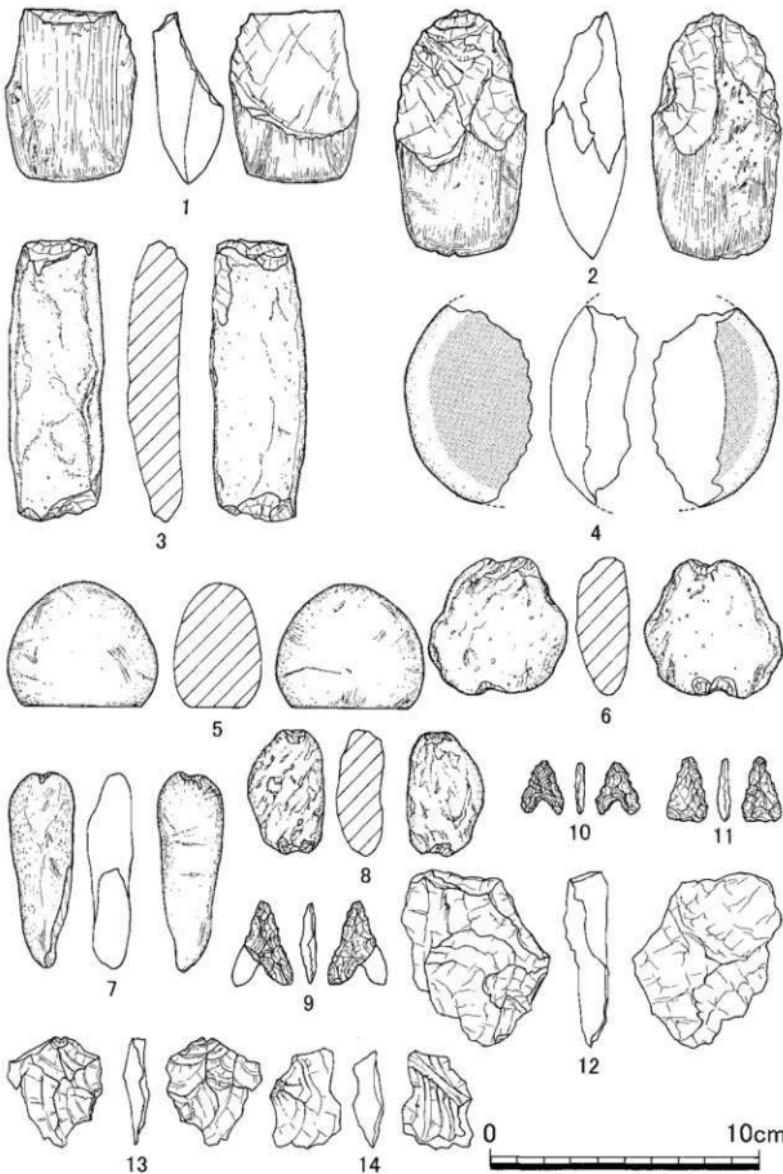
## 2. 実測石器（第11図・図版11—2）

出土器種や点数については第2表のとおりである。以下、主なものを抽出し、若干のコメントを記述しておくこととする。

1・2は、安山岩質製の半損した磨製石斧で、3点出土したうちの2点である。基部に製作時の打製調整痕がみられるものの、全体に磨研がゆきとされている。3も安山岩質のもので、石斧として作製しようとしたものが、半製したものであろう。両端部に打製痕がみられることから、敲石あ



第10図 土器実測図 (3)



第11図 石器実測図

るいは石錐に代用したものかも知れない。4・5は磨石で、前者は半損した花崗質、後者は砂岩系のもの。

6～8は石錐で、うち6は長軸径5cm(53g)、7は7.5cm(31g)、8は4.5cm(30g)を測るもので、いずれも両端を打欠く方法で作製したもの。9～11は石錐で、うち9は安山岩質、10はチャート、11は安山岩質のもの。12～14は剥片で、12・14は安山岩質、13は乳白色の黒曜石片のものである。

以上であるが、該当期における匹見町内の他の諸縄文遺跡では、必ずといっていいほど打製石斧が出土しているにもかかわらず、本遺跡では1点もなかったということは不思議である。チャート質のものは美都町との境である銅ヶ峰付近に露頭するということから、該地から供給したものだったかも知れない。

### 第3節 小 括

出土土器からみると、本遺跡は縄文中期に初源をみ、その盛行期は同後期前半期にあって、同後期後葉期に一端終焉し、同晚期中葉期に別集団が来住したという構図が読みとられそうである。それは中期末に比定できる阿高式土器によって判断でき、またその盛行期が後期前葉期であったことは中津式系統のものを中心に出土していることからいえようである。そして福田K2式・肥厚押捺文としているもの・縁帶文系などと後続する土器系統の資料がそのことを物語っている。

こうした土器資料からみると、本遺跡の縄文人は西方である山口地方から来住したのではないかと想像させる。それは例えば、中津式系統土器でいうならば、潮待貝塚に求めるとのできる類似片の出土や、また同併行期と判断してよい阿高式系を伴っていることなどからである。

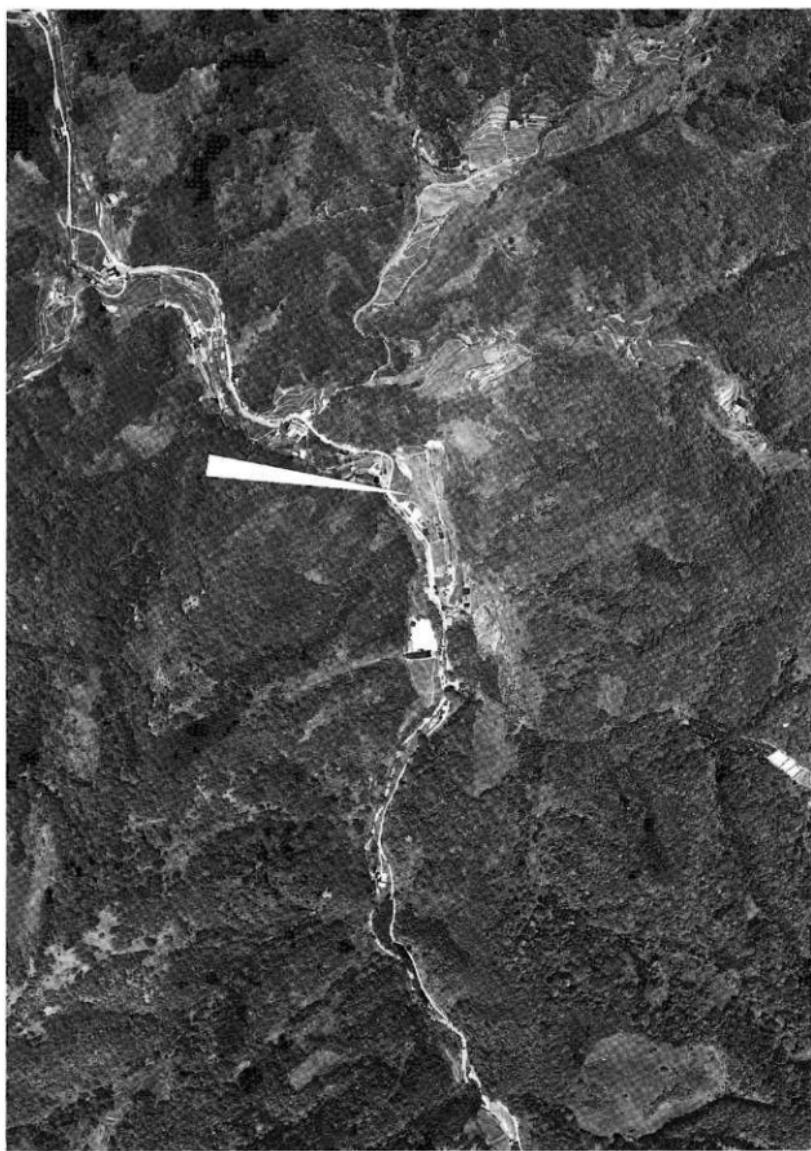
そして石材においては、姫島産と思われる乳白色の黒曜石が剥片を中心としているものの、他の安山岩質などと比べて優越量であるという事例が補強してくれる。直線にして10kmという石材の供給地冠山があるにもかかわらず、それを姫島に求めたということは、それを容易にする供給事状があったからにはかならない。それは強い近密度にあったことに生じたものと考えられるが、それこそ西方からの縄文人であったから可能であったのではなかろうか。また福田K2式と併行期のものである肥厚押捺文も伴っているおり、これも山口地方（周防灘沿岸）で釀成されたものであることを考えると、より論拠がはつきりてくるものと思われる。

約123m<sup>2</sup>という狭幅の調査面積であったが、質・量とともに多くの成果を得ることができた。最後になったが、土器の位置付けについては渡辺聰氏にお世話をなったことを記してお礼にかえるものである。

(渡 辺)



図版 1



鳥瞰する調査地点と周辺

図版 2



1. 調査地点遠望（北東から）



2. 調査地点近景（南から）



3. 調査区の設定（東から）

図版 3



1. 発掘風景（南東から）



2. 東西トレンチの発掘風景（東から）



3. 東西トレンチの南壁の堆積状況



4. A調査区の北西壁の堆積状況

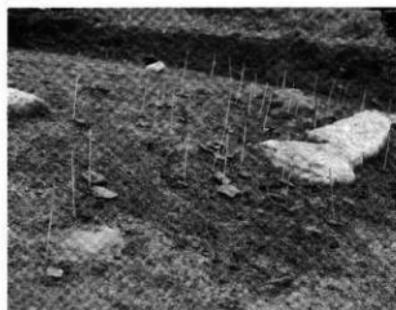


5. D調査区の南西壁の堆積状況

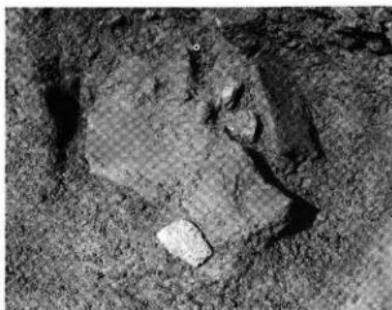


6. E調査区の南西壁の堆積状況

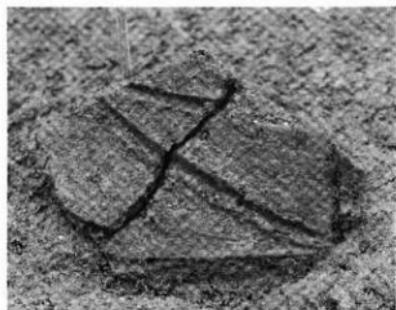
図版4



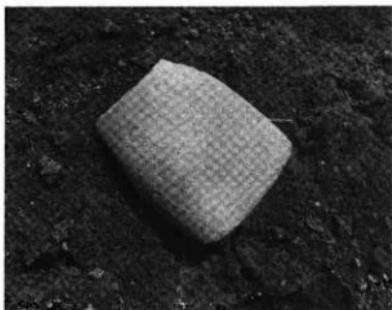
1. 遺物の出土状況



2. 土器の出土状況



3. 土器の出土状況



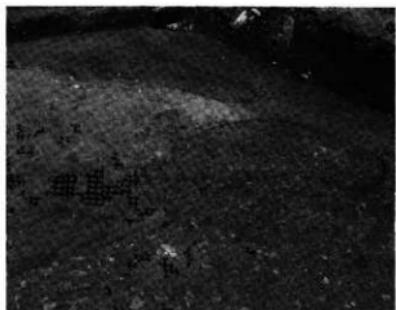
4. 磨製石斧の出土状況



5. 石鎚の出土状況



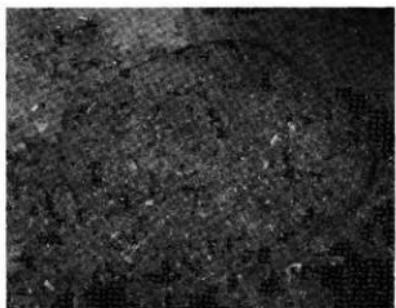
6. 黒耀石（乳白色）の出土状況



1. B 調査区の遺構表出状況（南東から）



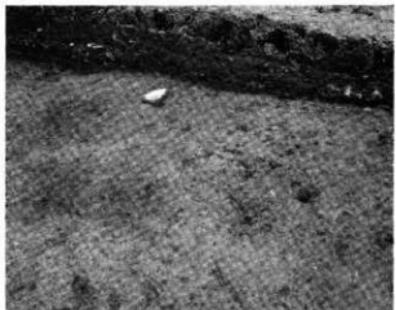
2. D 調査区の遺構表出状況（南から）



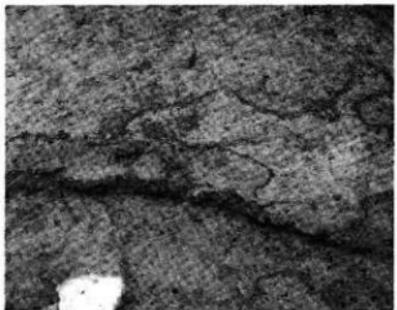
3. SK01遺構の表出状況（南東から）



4. SK02遺構の表出状況（南東から）

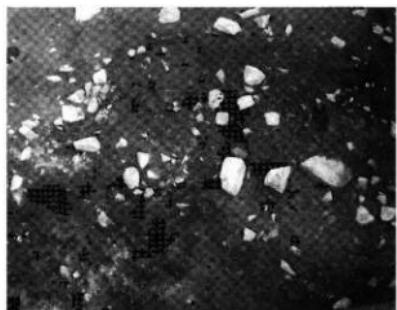


5. SK03~05遺構の表出状況（南西から）

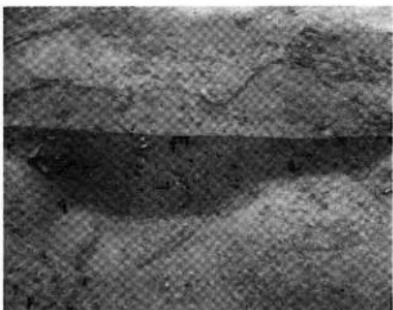


6. SK06遺構の表出状況（北西から）

図版 6



1. SK07遺構の表出状況（西から）



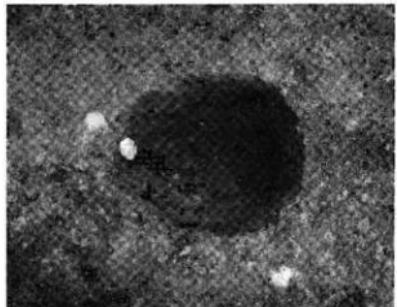
2. SK02遺構の半截状況（北西から）



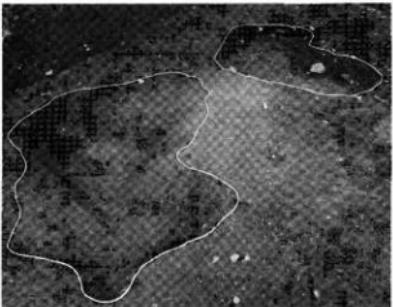
3. SK03・05遺構の半截状況（北西から）



4. SK06遺構の半截状況（北西から）

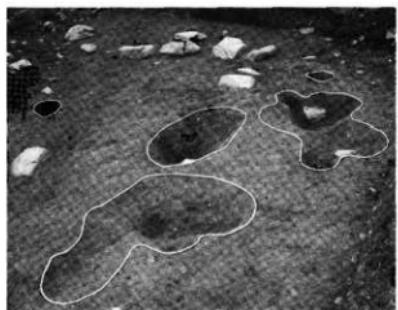


5. P01遺構の検出状況（北東から）



6. SK01・02遺構の完掘状況（南西から）

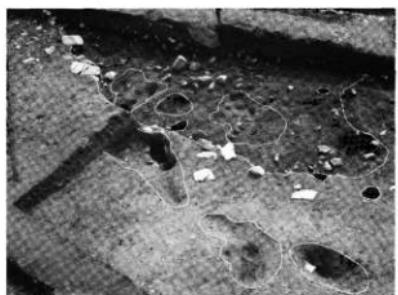
図版 7



1. SK03~05遺構の完掘状況（南東から）



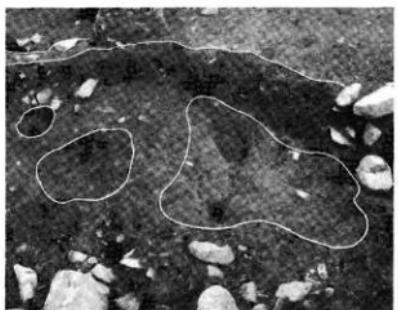
2. SK06遺構の完掘状況（東から）



3. SK07遺構の完掘状況（北東から）



4. SK07遺構の完掘状況（北から）



5. SK07-2~4遺構の完掘状況（西から）



6. A拡張・A調査区の完掘状況（南東から）

図版 8



1. B・C調査区の完掘状況（南から）

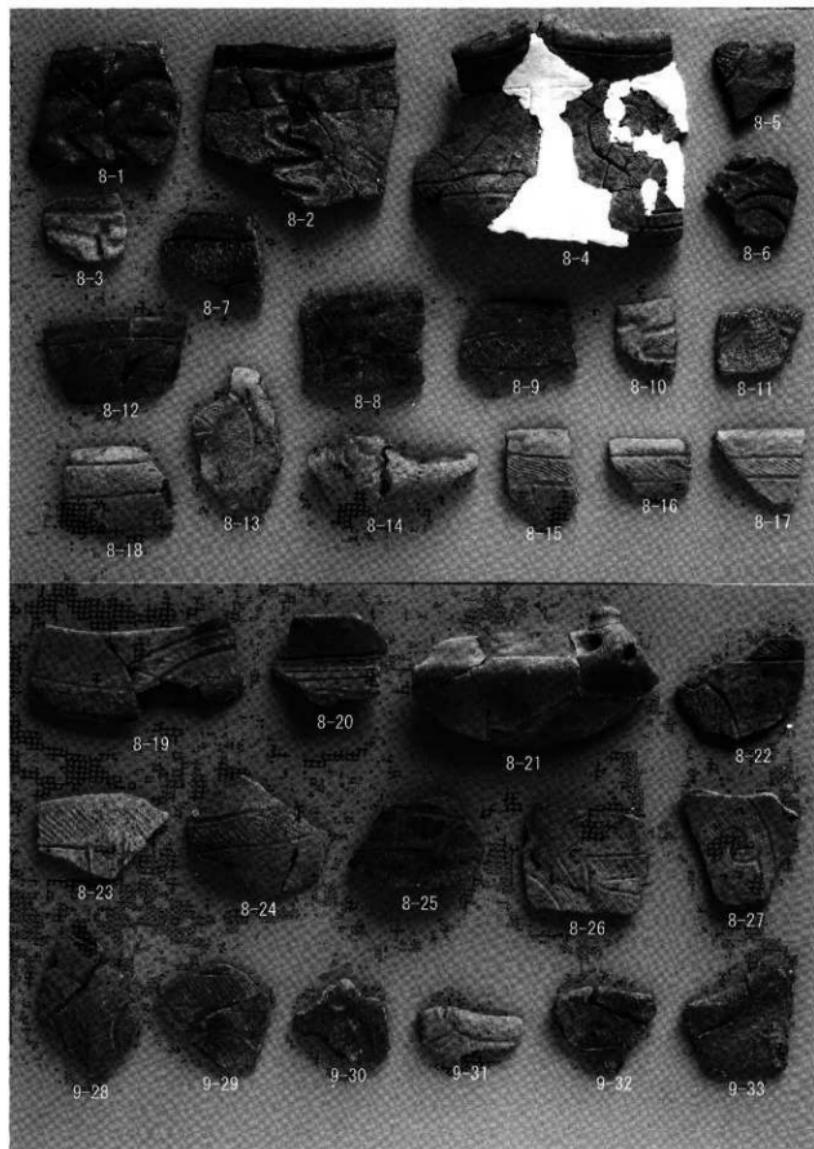


2. D・E調査区の完掘状況（南東から）



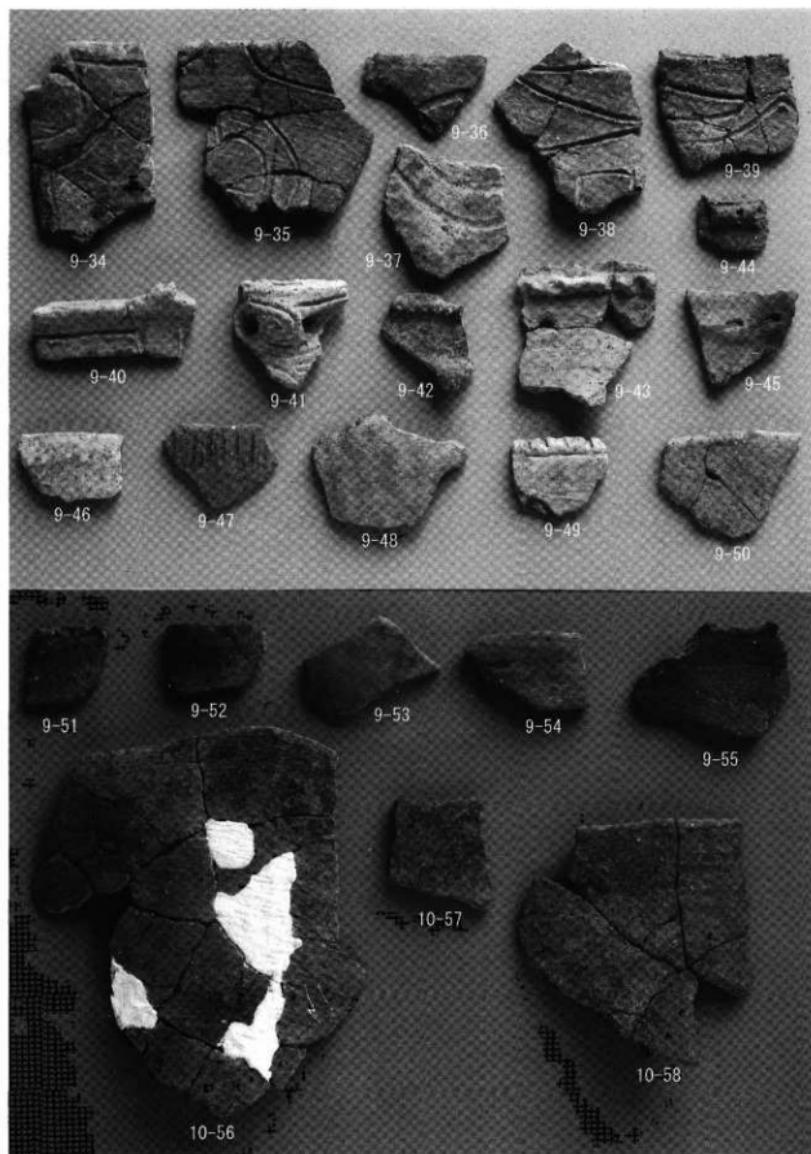
3. 全調査区の完掘状況（南から）

図版9



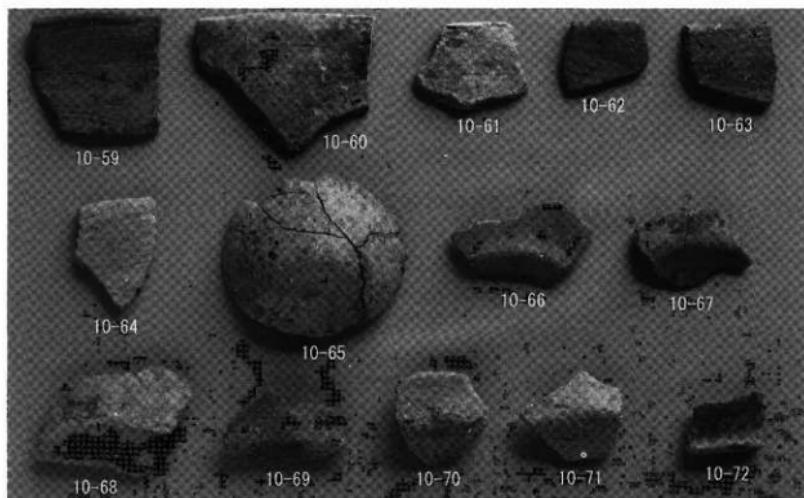
実測土器類（1）

図版10

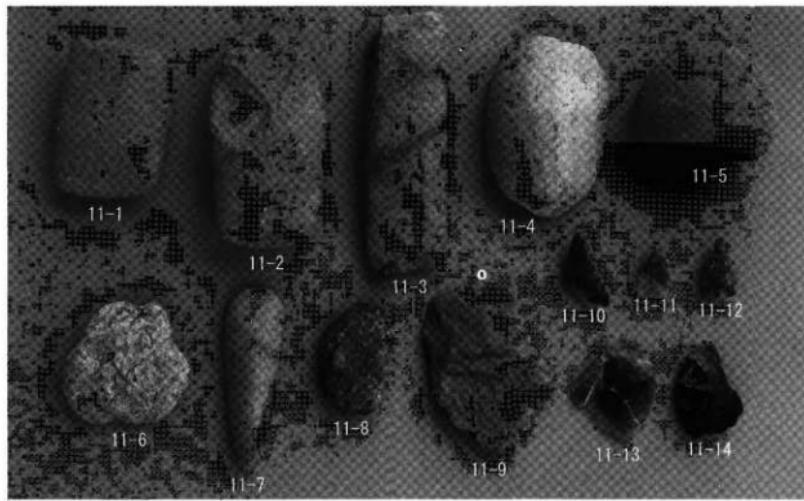


実測土器類（2）

図版11



1. 実測土器類（3）



2. 実測石器類

# 報告書抄録

ふりがな	ひろとえーいせきちょうさほうこくしょ							
書名	広戸A遺跡調査報告書							
副書名	市道内谷線石谷工区地方道路交付金（改良）工事に伴う							
卷次								
シリーズ名	益田市匹見町埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第50集							
編著者名	渡辺友千代 栗田美文							
編集機関	益田市教育委員会文化振興課（益田市埋蔵文化財匹見調査室）							
編集機関の所在地	〒698-0033 島根県益田市元町11番15号 (〒698-1211 島根県益田市匹見町匹見1233-1)							
発行年月日	西暦 2007年3月23日							
遺跡名	所在地	コード		北緯 東経	調査面積m <sup>2</sup>	調査期間	調査原因	
		市町村	遺跡番号					
ひろとえー 広戸A	しまねけんますだし 島根県益田市	32204		34度 32分 13秒	131度 55分 42秒	約120m <sup>2</sup>	2005.6.20 ～ 2005.8.29	道路 開発
いせき 遺跡	ひまみらようかいたに 匹見町石谷							
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項				
集落跡	縄文時代	柱穴 土坑	縄文土器類	黒曜石（乳白色） が頗著				
		焼土坑	石器類 陶磁器類など					
	住居址							

---

平成19年3月8日 印刷  
平成19年3月23日 発行

匹見町埋蔵文化財調査報告第50集  
—市道内谷線石谷工区地方道路交付金  
(改良)工事に伴う発掘調査報告書—

## 広戸A遺跡調査報告書

発行 益田市教育委員会  
島根県益田市元町11番15号  
印刷 西村印刷所  
島根県益田市南津六丁目27番8号

---